

入院第13日めードクターとのコミュニケーションがうまくいかない



主治医の土井ドクターはぼくが尊敬できるキャラクターだ。ぼくもできるだけ心を開いて話したいフランクなタイプの女性だ。

ところがこの土井ドクターも医師=患者をある種の個人的関係を混入した考え方を持っていることがわかった。妻とぼくがマスコミや實際行動を通じて、厚生省や医療機関そしてドクターについて、言いたいことの百分の一も言わずに、遠慮がちに批判してきた。そのことを捉えて、土井ドクターはこうぼくに尋ねた。「島岡さんは、外来の主治医の表千家先生とコミュニケーションが取れていらっしゃるんですか？」つまり、このドクターはこういう批判的なことを書いていると医師=患者の関係がうまくいかないとてもいいたいのかな？

「ぼくは、ええ。うまくいっています。彼もぼくも医師として患者として長いお付き合いですから、お互い思想的に変化していると思えますが、ぼくはコミュニケーションを取れていると信じています」と言ううと、ちょっと首をかしげて、「それならいいんですが・・・」と言う。「コミュニケーションが取れていない患者とは付き合い合わない」という選択がド

クターにできるのか、と長年学生と接触して学生を選ぶ権利がぼくにはほとんどなかったことを思い知っているぼくが思った。いろんな医療文献を読むと、医師=患者の信頼関係が大切などと書いてあるが、個人的な信頼関係が結果なのであって、実際ビジネスとして信用し合うかどうかということことが基本なのだ。

ドクターに患者がぼくのよにのべつ幕なしジョークを言うことはかなり迷惑なことらしい。今日点滴スタンドからついに開放されて、入院後初めて、広々としたデイルームで食事をとった。ところが自分の病室(422号)に帰ると、その前の廊下で土井ドクターが悲しそうな表情を浮かべて、点滴スタンドを握って立っていた。仁王立ちに見えた。彼女は言った。「すみません。週末は点滴を再開させてください。肝臓の数値がかなり悪くなっているものですから」ぼくは、暗然とした気持ちになったが、点滴のビニールの袋をなでながら、言った。「素敵な食後のデザートですね」

このように肝臓機能障害

が出始めたので、土井ドクターがぼくの職場の都合で「だいたいどのくらいまで、入院がOKなんですか？」と尋ねた。

「まだ大丈夫ですよ」「でも、入院中に夏休みに入ってしまうので(授業の方は)いいんですか？」

「国立大学は7月20日過ぎまで、授業があり、夏休みは事実上、8、9の2ヶ月です」

「えっ？ 8月、9月のうち何日間お休みが取れるんですか？」

「いろいろ業務がありますが、2ヶ月丸まるですよ」「えっ？えっ？ それでお給料いただけるんですか？」

「安月給です。土井先生と比べたら、殿様と百姓の差がありますが」

「何をおっしゃいますか！私のお給料の安さと言えば・・・びっくりぎょうてんなさいます。で、島岡さんはその2ヶ月もの間、何をなさっているんですか？」

「何をおっしゃいますか。あなた。ケンキュー、コクミンのためのケンキュー以外にないじゃありませんか」

「・・・ギモンの目つき・・・」

このようにドクターとのコミュニケーションはほとんどない。